

宮 沢 賢 治 —— その一側面

佐 藤 泰 正

一

周知の如く賢治の童話を除く数少い散文類のうち、その最初のものに「家長制度」と題する一篇がある。大正五年、賢治が盛岡高等農林学校二年在学中のものであり、恐らくは学生時代の旅行の見聞をもととしたものであろう。

「火皿は油煙をふりみだし、爐の向ふにはこの主人が、大黒柱を二きれみじかく切つて投げたといふふうにとつしりがたりと膝をそろへて坐つてゐる。

その息子らがさつき音なく外の闇から帰つて来た。肩はぼひろくけら、を着て、汗ですつかり黒寒天みたいに黒びかりする四匹か五匹の巨きな馬を、がらんとくらしい厩のなかへ引いて入れ、なにかいろいろまじなひみたいなきをしたのち、土間でこつそり飯をたべ、そのままころころ、藁のなかだか草のなかだか、うまやのちかくに寝てしまつたのだ。

もしも私が何かちがつたことでも言つたら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなきさうだ。それがだまつてねむつてゐる。たぶんねむつてゐるらしい。

火皿が黒い油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらへてゐる。酒呑童子に連れて來られて洗濯な

どをさせられてゐる。そんなかたちではたらいてゐる。

どうも私の食事の支度をしてゐるらしい。それならさつきもことわつたのだ。

いきなりガタリと音がする。重い陶器の皿などがすべつて床にあつたらしい。

主人がだまつて、立つてそつちへあるいて行つた。三秒ばかりしんとする。主人はもとの席に帰つてどしりと坐る。どうも女はぶたれたらしい。音もさせずには撲つたのだな。その證據には土間がまるきり死人のやうに寂かだし、主人のめだまは古びた黄金の銭のやうだし。わたしはまつたく身も世もない。」

以上が全文であるが、この文体のずしりとした重さと感觸は、すでに後の彼の詩の発想、語法に近いユニークなものであり、軋くともここには賢治自身の精神の底部を、核心を、つよくゆすぶる何ものかがこめられている。

その核部とは何か。我々はここで、彼が昭和六年九月再度発病し、ひそかに死の來たることを覺悟しつつ記した、あの「手帳」冒頭の一句を想い浮べる必要がある。賢治の死後、後に掲げる遺書と共に発見された「手帳」については、小倉豊文氏の「宮沢賢治の手帳研究」（二十七年創元社刊）という労作にくわしい処であるが「昭和六年九月廿日再び東京ニテ発熱」と記した、その第一頁には次のような言葉が記されている。

「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ、マタ北上峽野ノ松林ニ朽チ埋レントヲオモヒシモ、父母共ニ許サズ、癡軀ニ薬ヲ仰ギ、熱惱ニアヘギテ、唯是父母ノ意僅カニ充タンヲ冀フ——賢治は尚その後二年余に亘る最後の病床生活をおくることになるが、この冒頭の文字ににじむ深い想いは、爾後、死に至るまでの生活をつらぬいて変らず、彼の晩年のいくつかの仕事に、深い影を投げかけている。その最初の散文（家長制度）と、彼のゆきついたこの最後の言葉（いまま述べた如く、その时期的な意味よりも、内的な意義に於て）——この両極の切り結ぶ処に、彼の精神の深

い暗部を圧する何ものがあつた筈だ。

賢治の生涯をつらぬく一側面——その父親との微妙な、然し極めて深い内心の葛藤をふまえずしては、彼の晩年の精神の傾斜を、また、そのいくつかの作品（たとえば「手帳」中の「雨ニモマケズ」一篇などを含めて）の語るところを、真に理解することは出来まい。この評文の意図するところもまた、この一点にある。

二

賢治の生涯にわたる父親への深い畏敬の情、その孝心の深さについては、すでに多くの評家の語る処である。

「幼少からの賢治のなかにはぐくまれたその宗教的な情操が、全くそのまま、樹木の成長のようにまっすぐ伸びていったのは、そしてそういうことが可能だったのは、実は、賢治にとってそうした意味をもった父親という存在が、賢治自身の精神のなかで、生涯その権威を失墜しなかったところに、宗教的な情操の支柱があつたのである。つまり賢治にとっては、父が師であり、師が父であつたのである」——以上は古谷綱武氏の語る処であるが、氏は更に賢治の父に対するすべての書簡をつらぬいてゐるものは、「権威に対する実につしみぶかい敬意」であり「賢治は、その誕生から臨終に至るまで、父親の眼の前を生きたひとである」と語っている。

「父は凡ゆる点で兄より数倍上です」という弟清六氏の言葉や、「父と師とを兼ね合せた父というものは、めつたにあり得るものではない……賢治の場合は、心の師ともなり得た人を因縁によつてその父として持った……」（森莊己池）という言葉など、更に逐一あげるまでもあるまい。

然し、これらの通説に対して鋭い反論の楔びを打込んだものこそ、中村稔氏の「宮沢賢治」にはかならない。氏が従来の、いわゆるヒューマニズムの立場からの肯定的な賢治像に対し、その作品評価に於て、宗教性の問題、更にはその農民運動の評価に於て、いわば全面的に展開していった反論の軸ともいべきものは——「羅須地人協会」をめぐる賢治の活動の時代逆行的な限界、更にはそこから生れた晩年の深い挫折感、絶望感の指摘にあったが、同時に、その背後にあるものとして、彼の社会的特権者としての深い負い目の意識、更にはそれとからみ合った父親に対する内心の深い抵抗感ともいべきもの——その微妙な葛藤への洞察である。

「……何分にも私はこの郷里では財ばつと云はれるものの社会的被告のつながりにはいつてゐるので……」（母木光苑書簡）という賢治自身の言葉にもみられる、富裕な商家に生まれたことを生涯の負い目とした、その意識を深く重視して、氏は次のように語る。

「『なめとこ山の熊』を見るがいい、『カイロ団長』を考えるがいい、生産者を収奪するものとしてあらわれる商人に対するかれの憎悪ははるかに烈しく、宮沢家の財産に対するかれの劣等感はいっそう強かつたのではないかとあれ、宮沢家の一員であることが、かれを農民に奉仕させるべく義務づけた……」

氏は更に別の箇所でも「なめとこ山の熊」の一部にふれて「僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が、二度とつらも見たくないやうなやつにうまくやられることを書いたのが、実にしやくにさわつてたまらない」という箇所を引き「『二度とつらを見たくないやうなやつ』とはかれの父親についていわれたこととはぼひとしい」とさえ極言している。賢治の、この生家の家業、更には父親に対する抵抗感、加えて彼が若年の日以来、屢々試みた計画の多くが、父の反対によって挫折したことに注目しつつ、先の「家長制度」という一文にふれて、中村氏は次の如く記して

いる。

「僕にとつては、一通の手紙でたやすく一念に計画した生活設計を放棄する賢治は（註——一九一九年二月五日付の手紙に記された、東京に於ける人造宝石の製造販売の計画が父の反対によつて挫折したことをさす）音もたてずになぐられる女や、土間でこっそり飯をたべ、薬草のなかでごろりと寝る息子たちに似ているように思われる。そして、賢治にとつても、大黒柱のようにどっしりと坐っている家長の重みは、ただならぬものであつたらうと想像されるのである」——この指摘は、たしかに、この短文の底に流れる賢治自身の深い体感によくふれ得ているが、氏はまた、先に掲げた「手帳」冒頭の「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ」云々の語にふれ、これは通説の如く単に、「一九二一年一月から九月までの上京時代」及び「桜の生活、すなわち羅須地人協会時代の生活」にかかわるものではなく、「この手記を書くにあつて賢治の胸に去来したものは、たんにふたつの時代の回想だけだつたのではなくて、果しえなかつた、いわば失われた希望の総量だつたのではないか」と記し、賢治の生涯を通じて数次に亘り繰返される出京、東京での新しい事業の計画と父母の反対による挫折について精細に論じている。（「宮沢賢治——Ⅱ家について」）

たとえばその一斑として、一九二五年十月に記された、△云わなかつたが、△おれは四月はもう学校にゐないのだ
／＼恐らく暗いけはしいみちをあるくだらう（「告別」——「春と修羅」第二集）という言葉は一見、翌二六年四月からの桜の生活を指しているようだが、実は「学校をやめて一月から東京へ出る筈だつた」（森佐一宛書簡、一九二五年一月二三日）のが延びたことを思えば「暗いけはしい」生活は、東京の生活を予感したものであつたとも考えられるし、更に、同じく森佐一宛の二六年四月五日の書簡にみる「学校をやめて今日で四日、木を伐つたり木を植え

たり、病院の花壇をつくつたりしてゐました。もう厭でもなんでも働かなければならなくなりました」という、その計画の中絶の背後に「この挫折においても父の反対が原因したろう」ということは、想像にかたくなくない」と記している。

「『唯是父母ノ意僅ニ充タンコトヲ冀フ』——すべての挫折、羅須地人協会の挫折も、また十年來の宿望たる東北碎石工場の仕事の挫折をもふくめて、すべての挫折のうちに、賢治が抱いたものはそうした諦めであった。この序が書かれて『雨ニモマケズ』が書かれるまでにはもう約一ヶ月しかなかったはずである」——中村氏はこのような言葉を以て、賢治の生涯をつらぬく「家」の重圧感、それからの脱出の試みと挫折を精細に論じた一章「家について」を結んでいる。

すでに見る如く、中村氏はあの「家長制度」と「手帳」冒頭の一句——この両極を「家」の重圧感と、ついにそこから脱出しえなかつた挫折感という単一な道筋に於て結びつけようとしているかに見える。然し果してそうなのか。むしろ逆ではないのか。それは両極であることよつて真に切り結ぶ処があり、そこから逆に反流する何ものかがあつた筈だ。

恐らく中村稔氏の「宮沢賢治」論一卷の手柄は、從來の賢治の理想像を逆倒させ、その生涯をつらぬく挫折、その負の側面を照らし出した点にある。氏がこの冒頭の手記から「雨ニモマケズ」まで僅かに一ヶ月しかなかつたと記す時、氏はこの手記にみる諦観がそのまま「雨ニモマケズ」の挫折感に折り重なっていることを注視しているのである。然し「唯是父母ノ意僅ニ充タンコトヲ冀フ」の一句に、我々は単なる挫折感、諦観をのみ汲みとることが出来ようか。

「嚴父の『慈』慈母の『悲』には最早さからいかね——寂しき諦観にせずかに生くるより外に術がなかったのである。父母の慈悲は有難い。しかし、そこには家族制度が生んだ明暗二相の人間悲劇がしみじみと感ぜられるではなからうか」とは、同じくこの「序」にふれて小倉氏の記す処であるが、然し我々はこの「序」にはじまる「手帳」の隨所に、また遺書や晩期の詩稿の多くにみる、父母への異様なまでの謝念の深さを、どう解けばよいのであろうか。

東京で再び発病後、八日にしてその病軀を故郷にはこんだ彼は「この時はじめて父に向つて『わがままばかりしてすみませんでした。おゆるし下さい』という意味の言葉をもらした」という。父政次郎はこの時の様子を語り「これまでの賢治は洪柿でした。この病気でようやく熟柿になりました」としみじみ語つたという。

この「手帳」と共に死後トランクの中から発見された父母宛の遺書には、次のように記されていた。

「父上様、母上様、この一生の間どのどんな子供も受けないやうな厚いご恩をいただきながら、いつも我儘でお心に背きたうたうこんなことになりました。今生で万分の一もついにお返しできませんでしたご恩はきつと次の生、又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びだしてください。その題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします」

これは先の手帳第一頁の文字に続いて、翌二十一日に記されたものであるが、この遺書にみる異常なまでのパセティックな昂ぶりは、先の言葉ににじむ想いと共に、三十六、七頁（十月二十八日）には、次の如き言葉となつて、再び記されている。

△快樂もほしからず名もほしからず、いまたゞ、下賤の癡癩を法華經に捧げ奉りて、一塵をも点じ、許されては父母の下僕となりて、その億千の恩にも酬へ得ん、病苦必死のねがひ、この外になし▽

これはまた遡れば、次のような詩稿一篇（「疾中」冒頭の作）にも通ずるものである。

△われのみみちにたゞしきと／ちちのいかりをあざわらひ／ははのなげきをさげすみて／さこそは得つるや
まいゆゑ／こゑはむなしく息あへぎ／春は来れども目に三たび／あせうちながしのたうてば／すがたばかりは録されし／げはん下品ざんげのさまなせり▽

もはや手帳随所に見る、自らの「高慢」を警する自戒を逐一あげるまでもあるまい。その生涯をつらぬく献身無私の営みにも拘らず、家業をつがず、定職を持たず、理想に走った自身の驕慢を許し、深く包んでくれた父母に対する謝念は、「癡軀」をその膝下に横たえつつ、愈々深まるものがあつたと思われる。

この自らを「下賤の癡軀」「下品ざんげのさま」とよぶ、その痛切な意識と共に、手帳随所に記す法華経の経文・題目の書写の裡に、おのずから浮び上つて来るものは、小倉氏も言う如く「無量無辺の諸菩薩の地涌を念願する」深い祈りであつたらう。小倉氏は「農民芸術概論綱要」に録された周知の句——「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」「ここには多くの解放された天才がある。個性の異なる幾億の天才も併び立つべく、斯て地面も天となる」などの語をあげ、「天才」とは「地涌の菩薩」の「すぐれた現代語訳である」と述べている。確かに「地涌の菩薩」を念ずる信仰は、早くから彼の裡にきざしたものであつたらう。然し、かつての「天才」の語にみる昂然たるひびきが、この手帳の中に裏われていることを見逃してはなるまい。

彼は「春と修羅」第二集の序に次の如く記している。

「けだし、わたくしはいかにもけちなものではありませんが、自分の畑も耕せば、冬にはあちらこちらに、南京ぶくろをぶらさげた水稻肥料の設計事務所も出して居りまして、おれたちは大いにやらう、約束しよう、などといふこと

よりはもう少し下等な仕事で、頭がいつばいなのでございますから。さう申したとて別に何でもありません。北上川が一ぺん氾濫しますと、百万疋の鼠が死ぬのでございますが、その鼠らがやつぱりわたくしみたいな言ひ方を、生きてゐるうちは、毎日いたして居りますのでございます」

この皮肉な言い方のなかに、やはりつよい昂ぶりが感じられる。今それが裏返されて、というよりも、自分はその「ねずみ」でさえありえなかつたという意識——すでに述べた如く（「宮沢賢治管見」——「近代日本文学とキリスト教・試論」所収）農民との埋めがたい裂目、自分はずいにその苦しみを共にし得ない特権者であるという意識が——また父母に対しても不肖な高慢な特権者であつたという負い目と重なり、彼を深く追いつめていったのではないか。「父母の下僕となりて」云々の語や、「法を先とし、父母を次とし、近縁を三とし、農村を最後の目標として」（「手帳」四十三、四十四頁）などの語を重ね合せてみれば（彼がここで「社会」という文字を消して「農村」と改めていることも見逃せない一事だが）仏法、父母、近縁、農民の下僕となつて身を埋めんとするつよい祈りこそ、この手帳をつらぬく深い志向とみることが出来る。このことは「手帳」の一頂点を示す「雨ニモマケズ」一篇の、あの「デクノボー」云々の語にもみることが出来る。

小倉氏は、賢治のいう「デクノボー」と関連のあるものとして、「手帳」一一〇、一一一頁に録される「不輕菩薩」——「法華輕常不輕菩薩品第二十」に出てくる菩薩で、常にすべての比丘、比丘尼、優婆塞、婆夷を礼拝讃嘆して、「敢て汝等を輕しめず、汝等皆當に作仏すべし」と言い、悪口罵詈、打擲を避け走つては猶こゝろ高声こゝろにこの語を唱え、法華經の功德によつて成仏したという——この菩薩像とのつながりに深く注目している。

確かに、我々はその「雨ニモマケズ」一篇の詩句の流れをもう一度ふり返つてみれば、△欲ハナク／決シテ願ラ

ズ／イツモシヅカニワラツテキル／……アラユルコトヲ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ／ヨクミキキシワカリ／ソシテワスレズ▽——このような詩句ににじむ、さわやかなひびきが、この不軽菩薩のころやかな挙措に通ずるもののあることを感得できよう。確かにここでは作者の感慨の表白というよりも、多分に菩薩像のイメージから受感されたもの——といった風に、詩句はころやかに展がっている。

ただ、このころやかさが、詩の終末に近づくに従って△ヒデリノトキハナミダヲナガシ▽以下のパセティックな祈りに変転してゆく処に、彼の深い痛みを、さらには贖罪感といったものを、よみとることができよう。こうしてこの詩の主題は、最後の「デクノボー」というイメージに収斂されてゆく。彼がこの「デクノボー」というイメージになりつよく執着したことは「手帳」七〇—七三頁に記された「土偶坊」の劇化の草稿にも窺うことができる。

それは「第一景 葉トリ。第三景 青年ラワラフ 土偶ノ坊石ヲ投ゲテ遁ゲル 第五景 ヒデリ……」といった風な覚書にすぎない。然し、見出しに「土偶坊 ワレワレハカウイフモノニナリタイ」と記されているところからも作者の関連は容易に窺われるが、一見かるい喜劇風な劇化を意図したこのモチーフの根柢にも、我々は彼の深い祈りにつらなるものを感じ得る筈だ。たとえば私は「土偶坊」という誤記に注目する。言うまでもなく「木偶坊」であるべきだが、この誤りは些事ではあるまい。ここに見るものは単に、この語本来のクグツという、人の手にあやつられる人形⇨愚人という発想ではなく、土の中にのめり込み、農そのものと化そうとする、彼の深い祈り、更には、あの「土の器」——碎けては、もろくも土に帰する被造物の虚しさへの自覚につながるものをさえ感ずることが出来る。無意識になされた誤記の裡にも、このようなくされた深い志向を讀みとることが出来る。

宇宙の微塵、天才、ねずみ、地涌の菩薩——これらのかつてのイメージが下賤の癡軀という挫折感、贖罪感に深く

つながることによって、重なり、屈折し、一語に集約されたものが、彼のいう「デクノボー」ではなかったのか。ここには自嘲ののがさも、愚人礼讃的な素朴な観念もない。自らを「修羅」と観じた人が、自身を追いつめた何かがある。「行きついた境地」とか「宗教的に突き抜けた世界」などという言葉では割り切れない何かだ。中村稔氏の言う如く、ここに挫折感や敗北感はある。然し、それは氏の言う如く「追いつめられた」ものではなく、彼が自身を敢てこのように追いつめた処に、その深い宗教的資質にからまる面目があるのではないか。

どうやら我々はこのあたりで、ようやく問題の核心にふれて来たようだ。家や家族制度が、父母の存在と重なって、賢治の数々の願いや夢を封ずる重圧となったとしても、然し、そこに単に一方的な重圧感のみ見ることは出来ない。私はそこは逆流するもの、更には賢治の奥深くさしむるものを、あるするどい痛みを見逃すことは出来ない。我々はそのしるしの幾つかを、晩期の作品から読みとることが出来る。

三

賢治の晩期の未完の詩稿中、昭和三年発病時の作と目されるものうち、次のような一節を含む詩が二篇ある。

△あゝそのことは / どうか今夜は言はないで / どうか今夜は言はないでください / 半分焼けてしまった肺で
／ からもからも / 炭酸を吐き / わづかの酸素を仰ぐいま / どうしてそれがきめられませう……▽
△こんなにも切なく / 青じろく燃えるからだを / 巨きな鉄槌でも叩き / 鍊へるといつてゐる誰かがある……▽
…▽ (傍点筆者)

小倉氏は、この詩句にみる「病氣の肉体的苦痛だけでなく、その間に何か強い精神的圧迫のあったこと」を示す点にふれ、次の如く記している。

「この点から森莊己池氏は、昭和三年の發病当時、嚴父に強く叱嘖された時のものであらうと推定されている。私もこの推定が正しいと思う。そして、この叱嘖は和光同塵の世俗生活の中に『自利他円満』の大乗仏教の菩薩道の成就を常に念じている嚴父が、三十才をすぎても一定の職業をもたずに、理想にのみはしって利他ばかりに熱中し、父母兄弟に心配ばかりさせ、結局は『親の躰かぢり』になってしまっている賢治の行動に対しての、嚴しい反省を求めたものではなかつたかと、私は思う。賢治自身、自分が定職に落ちつかず、世俗的な生活力にとぼしいことは常に悩んでいたから、この肺炎中の父の叱りは病苦と共に胸えぐられるものがあつたであらう」——この小倉氏の解釈は恐らく正しいものであらう。然も、私はここに賢治が「誰か、が」といった、その微妙な表現の機微に、ある言いがたい、彼と父とのひめられた心の底深い葛藤を、そのするどい痛みを、感ぜずには居られない。

この微妙な消息を迎れば、更に次の如き一篇をも挙げる事が出来よう。晩期、彼の記した「文語詩稿壱百篇」中「父と子」（初題「銀行家とその子」）と題したものである。

△「水榭松にまじらふは クロスワードのすがたかな」／誰か、やさしくもの云ひて いらへはなくて風吹けり

「かしこに立てる榭の木は 片枝青くしげりして／パンの神にもふさはしき」 声いらだちてさらに云ふ

「かのパスを見よ葉桜の 列は氷雲に浮きいでて／なが師も説かん順列を 緑の毬に示したり」

しばしむなしく風ふきて声はさびしく吐息しぬ／「こたび縣あがたの負債おひめせる われがとがにはあらざるを」（傍点筆者）

ここにも「誰かやさしくもの云ひて」云々の一句がみられる。それが、この作中の父親を示すことは言うまでもないが、一見、抒情的な静謐な詞調の背後に、作者自身と父親との微妙な葛藤を推測することも出来る筈だ。尠くとも彼自身の内部のきしみを、たとえばこの詩の、次の如き異稿一篇の裡に、更にあざやかに読みとることが出来る。

△黒き燕尾の胸高く／略綬の銀をかかげつつ／商主その子とつれだちて／丘の高みに立ちしとき／積雲焦げて盛りあがり／油緑の桑もひかりけり

「かしこに立てる櫓の木は／片枝青くしげりして／そのたたずまひつねならず／パンの神にもふさはなん」
商主は声を清くして／かしらも青くそりこぼち／麻の袍などつけにたる／その子善主にかたれども／子はいらへせずそらを見ぬ

「かしこに見ずや新緑の／柏は松にまじはりて／古きことばのモサイクや／クロスワードのさまなせり／かくのごときを静六は／混こう林となづけしか」

商主はほほゑむげしきにて／ましろき指をあげたれど／その子はさらに悦ばず／ふたたび天を仰ぎける

「かのパスを見よ薬桜の／列は水雲につらなりて／なが帥も説かん順列を／緑の毬に示したり／そのうるはしき丘丘も／やがてなんちのうちまかせんに」

商主かすかにいらだてば／燕尾も風にりと鳴りぬ

「すでになんちに与ふべき／丘と森とのつらなりは／億のアールを越えたれど／なんちは百に倍し得ん」商主しきりに子を説けど／青きかしらをそりこぼち／麻の袍などつけにたる／その子憂ふるけしきにて／むしろなみだをふくめるとし▽（傍点筆者）

この異稿では、定稿の背後に押しやられていた「子」のイメージは、むしろ表面によく押し出されている。たとえば終末の一句、その子憂ふるけしきにて、云々の語を引くまでもなく、ここでは、誇らかな父に對し、黙して語らざる子の憂いが、痛みが、よりつよく描かれている。然し、定稿が一転して、子の姿を背後に押しやり、むしろさびしく吐息する父の諦観にも似たものをのみ唱うことによって、古典的な詞調の裡に完成されていることは、何を意味するのか。ここには単なる改稿、あるいは推敲という操作を超えた問題が含まれているようだ。

我々はこので、彼の晩期童話中の傑作とされ「彼のもっとも内奥のパスナリティを漏洩している」(宇佐見英治)と目されるあの「銀河鉄道の夜」の一節をも想い浮べることが出来る。

「その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかが一生けんめいはたらいてゐる。ぼくはそのひとにほんたうに気の毒でそしてすまないやうな気がする。ぼくはそのひとのさいはひのためにいつたいどうしたらいいのだらう」

作者の分身ともいべき少年ジョバンニの独白の部分だが、ここにも「たれか」という一語が記されている。これもすでに別の文中に記した処であるが(中村稔の『宮沢賢治論』をめぐって)——「兄弟」一〇一号基督教徒兄弟団刊)初稿によれば「そして私のお父さんは、その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、僕に厚い上着を着せようとしたのだ」という語の示す如く、父親の自己犠牲に對する、ある深い負い目が語られているのに気づく。

中村稔氏の「宮沢賢治論」は、富める生家の社会的被告としての負い目を、また賢治に對する家長としての父親の

圧迫感、更には父の拒否によるその事業の挫折を——いわば父と子のかかわりを負の側面に於て、鋭く追求しようとした点については、すでに述べた。たしかにそれは、従来の賢治論に対する反論的な楔びを、深く打込んだものと言えよう。然し、ここにもまた、裏返された偏向への傾きはなかったか。

父による社会的な負い目に対して、父に対する負い目が、父の重圧による挫折に対して、子に報われなかった父の孤独が——言わば、子の痛みに対して、父の痛みが忘れてはいなかったか。尠くとも賢治の晩年の作品には、以上の例にもみる如く、父の痛みに対する賢治の想いが、彼自身の内部における深い矛盾、葛藤としてみられる。

彼の青白く燃えるからだを、巨きな槌で叩きつつ、まだまだ錬えねばならぬと八さう云つてゐる誰かがある——父は、もはやここでは単なる父としてではなく、ひとつのきびしい鞭として、内なる声として、倫理的な相貌を帯びて彼の心肉にくい入る。それはもはや、肉なる父を超えた「誰か」であると共に、「誰か」というひとつの膜をへだてた微妙な言葉でしか呼びえぬ、何かであった筈だ。我々は晩期の詩稿「父と子」にも、また「銀河鉄道の夜」の一節にも、そのしるしを読みとることが出来る。

さてここで、我々は再びあの「手帳」冒頭の言葉に還つてゆこう。すでに諸家の言に見る如く、そこに病者の諦観を読みとることは容易だ。然し「父母共ニ許サズ」の一語に、父の痛み、にふれ、それを包まんとする子の痛みを読みとらねば虚しいことであろう。「大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ、マタ北上狹野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒ」——彼はまさしく父母の眼から離れ、消え、自らを没し、自身の夢み、望む世界に没入せんとした。然し今、彼は

「癡軀ニ葉ヲ仰ギ、熱惱ニアヘギ」つつも生きねばならぬ。新たな隣人として、父母の膝下に生きねば、生きはじめねば、ならぬ。愛とはかくもひとを捉え、縛し、限定せんとするものなのか。「父母共ニ許サズ」——この一句には、彼の驕慢への深い自戒と、己の不羈なる行蔵をなお包まんとする、両親の痛みと慈愛への、深い謝念のひびきがつよくにじんでいる。

病床二年余、小康を得て、恐らくは父母の強い反対を押し切り、再び碎石工場の仕事に没頭しはじめた賢治の姿には、何か慥かれたようなただならぬものがある。然し、再び上京中発熱し、敗残の身を父母の許に横たえた彼にとつて「癡軀」云々の語は、もはや単なる諦観のみ示すものではなく——自らの昂ぶりのままに走らんとして挫折した破れが、自身の高慢へのしたたかな悔いと共に、もはや単なる肉の破れではなく、言わば全存在的実存の破れとして、表白されているかに見える。

△けらをまとひおれを見る農夫／ほんたうにおれが見えるのか▽と記した若年の自分に、自身以外の何が見えていたというのか。彼は自らの破れを通し、今始めて眞の隣人としての、他者としての両親に、その痛みに於て出会ふ。

「癡軀ニ葉ヲ仰ギ、熱惱ニアヘギテ、唯是父母ノ意儘カニ充タンヲ冀フ」——中村氏はこの一句に、彼の失われた希望の総量を見るところが、むしろここにはその全存在的破れのなから、なお新たに見出されたものとして生きはじめんとする、新生への深い祈りこそが、こめられているのではないか。「手帳」一巻をつらぬくものは、これ以外ではなく「雨ニモマケズ」中の、あの△ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ▽の詩句ににじむものも、また痛みに於てはじめて他者に出会う——彼の告白以外の何ものでもあるまい。

「殆んどあすこ（註―桜の生活）でははじめからおしまひまで病気（こころもからだも）みたいなもので」という言葉にも、自分以外の何が見えていたのかというにがさが、こめられていた筈だ。

四

賢治における宗教性とは何か。たとえば、最も最近における「宮沢賢治論」の特集として「文学」三月号に諸家の論が掲げられているが、その一篇、山本太郎氏の「詩人・宮沢賢治」中に、氏もまたその晩年の道行を次のような見取図の裡に描きとらうとしている。

「修羅を離れた彼の心が、病気の進行とともに次第に詩人と農業技術の部分をきりすて、宗教的感情にみちるのを僕は『春と修羅』第四集もしくは死を前にした「肺炎詩篇」などをみていて感じる。一人の天才がその宗教的氣質ゆゑに自我の滅却をいそぐ有様がずいぶんつらくよみとられる」（傍点筆者）——ここでもまた「宗教的氣質」——「自我滅却」というあいも変らぬ等式が示される。氏もまた「雨ニモマケズ」を目して、中村氏同様「病床にある賢治が『ふと書きおとした過失』」とし、その「説法臭」の故に「ようやく他力の世界に入る戸口で——不用意に述懐された一心境にすぎない」ものとして否定する。

「雨ニモマケズ」一篇の示すものを、このような行きついた境地としての「自我滅却——自己大肯定の発露」とみるか、或いは又、すでにみる如く「癱軀」云々という、実存の破れからの新生への希求とみるか——評価はおのずから分たれるであろう。然し、あの発病時のパセティックな昂ぶりを踏まえつつ、やがてその四日前の十月二十九日の

項に「疾すでに治するに近し」と記す如く、健康の一时的な恢復と共に、ひそかに夢みられ、希求された、己が新生への深い祈りこそ、この詩稿の真のモチーフではなかったのか。

中村氏は「雨ニモマケズ」の一篇の背後に、羅須地人協会の挫折を経た賢治の「烈しい憂悶と悔恨」を、その「孤独と無力感」を深くよみとらねば虚しいことだという。然し、その悔恨と憂悶とは、何に発するものであったのか。

「私のかういふ惨めな失敗はただもう今の時代一般の巨きな病、『慢』といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんからだに付いたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しめ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味うこともせず幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、ただもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといつたやうな順序です」

この死の十日前に記された書簡（柳原昌悦宛）と、あの「手帳」冒頭の言葉をひきつけて見れば、おのずから明らかなであらう——あの「癡驅」云々という実存の破れの裡に、爾後賢治がひそかに見すえていたものが、ここにも尙あざやかに記されている。

「雨ニモマケズ」を「羅須地人協会からの全面的退却」と見、「農民芸術概論」の理想主義の完全な敗北」と見る時、中村氏の言う如く、それは「ふと書きおとした過失」とも見えよう。然し、それはむしろ逆ではないのか。羅須地人協会が、「農民芸術概論」の理想主義が、後退ならぬ、敗北ならぬ、破れとして、全人的な破れとして受けとめられた故、彼のいう「慢」という時代病云々の語は、賢治自身をつらぬき超えて、ひとつの時代へのきびしい批評

となる。

△ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオアルキ／ミンナニデクノボートヨバレ▽——この一句が「手帳」の一頂点として、賢治晩年の、いやその全生涯の何ものかを示す如く、今日なお我々の心をゆすぶるの、その破れからの新生への祈念の深さに発する故に、他なるまい。

この新生への祈りへと押し出されてゆく——基軸となったもの、尠くともその最も重要な部分に、若年の日よりの父との、あの内心の深く微妙な葛藤があったことは、もはや重ねて付言するまでもあるまい。